

「複数国家からなる一つの世界におけるグローバルな正義」 上原賢司

博士論文 要旨

本研究は、国境を越えた正義／不正義という規範的問いの探求を目的とする、グローバルな正義について論じるものであり、この正義についての一つの見解の提示を試みるものである。現代政治理論の文脈においてこのグローバルな正義は、国内社会を焦点に当てていた従来の社会正義論が沈黙し続けてきた領域を埋めていこうとする、社会正義論の空間的拡大の試みとして理解することができる。

そうした研究は従来、国内的な社会正義論をそのままグローバルに拡大すべきだと主張するコスモポリタニズムと、国内社会とは別個の、より限定的なグローバルな正義を主張する国家主義という二項対立的な見解の中で進められてきた。近年の何人かの理論家によって、そうした状況の打開が試みられてきたものの、それぞれの正義構想に対する適切な批判的検討が欠けていたこともあって、従来の論争軸の延長に留まっており、また、国家主義とコスモポリタニズムそれぞれの立場から見て説得的な論拠を提示することができていない。

このような理論研究を背景として、本研究では、「これまで蓄積されてきた社会正義論の見地を踏まえた場合、どのようなグローバルな正義論を描写していくことができるのだろうか」という問いを立て、従来とは異なる一つの応答を試みる。その論証を進めていくために本研究では、これまでのグローバルな正義論、つまりコスモポリタニズムと国家主義それぞれがこれまで展開してきた理論（特に J・ロールズの『諸人民の法』およびそれへの批判、擁護にあたる他の論者による著作群）を研究対象としていく。

本研究の特徴は大きく二つある。一つは、国内的な社会正義論から出発した様々なグローバルな正義論において、分配的正義の要求と制度的関係とが密接に関連しているという理論前提に注意を促し、従来の対理軸の検討を行うという点である。二つめは、グローバルな正義論によって提示される正義構想を、理想の描写に関わる「理想理論」と、理想実現に向かう上での道徳的指針の提供に関わる「非理想理論」との分節化を用いて、先行研究の内容を再整理し、批判、検討していくという点である。

これらに着目することで本研究は、以下の主張の論証を試みる。複数国家からなる一つの世界という国内と世界との制度的関係の二重性がグローバルな正義論の理論的前提に据えられるべきであり、そこでのグローバルな正義構想は、制度に関する正義を各国家とグローバルな制度とで二元的に捉えること、国際協働の成果に限定した特殊な範囲の分配的正義を要求することになる。

本研究はグローバルな正義論研究において、従来の二項対立的で両極端な正義構想のいずれでもない正義構想の可能性を提示しているという点で独自のものである。そして既存の国家主義やコスモポリタニズムの立場に対しても、それぞれの理論の欠点を新たな論争軸から示すことで、グローバルな正義論全体におけるさらなる研究の洗練、水準の向上に貢献することになると考えられる。